

## 牡蠣と芍薬

村松 武司

一九六一年の冬だった。わたしは秋山清に会った。

その前年の十一月二日、ロンドンの中央刑事裁判所は、D・H・ロレンスの「チャタレイ夫人の恋人」の無削除版の出版が無罪であるとの判決を下し、ペンギン出版の同書二十万部は陽の目を見ることになった。十月二一日からのタイムズ紙は逐次その裁判中の証言を発表していたので、わたしは自分の関わっている「BOOKS」という小さな雑誌に、証言を連載する計画を立てていた。

秋山清にそのような話をし、そして、同じ号に何でもいから書いてほしいが、できるならば、史実にもとづいたフィクションを、と念を押した。

それまでわたしは秋山をよく知っていたわけではない。秋山が関わった詩誌「コスモス」

と、戦後ほぼ同時期に創刊した「純粹詩」のちの「造形文学」に、詩の執筆を依頼したことがあった。（「狛犬」一九四九年七月発行「造形文学」三三集）。そしてその後、一九五六年十一月の石川三四郎の追悼講演会で、岩佐作太郎の発言につよく異議を述べた印象が、わたしに残っていた。わずかにそんな記憶だけで、秋山に会い、原稿を依頼したのだと思う。

わたしは当時「チャタレイ夫人の恋人」を翻訳出版して禁止処分をうけていた出版社、小山書店に関わっていたので、前年のロンドンの裁判所の判決には関心を持っていたし、できればもういちど無削除で出版したかった。芸術かわいせつか、などという議論の次元から、表現の自由を、もういちど論議したかった。そのような一編集者の思い込みに、秋山が沿ってくれたか、くれなかつたか、知らないが一文を書いてくれた。

「バクーニンの夢」というものであった。こちらの注文のように史実に沿って書いている。しかし、死を前にしたバクーニンがどんな夢をみたかについては、書いた者の想像によるしかない。したがって、この原稿はバクーニンを藉りた、秋山の夢といってもいい。

「……ミハエル・バクーニンは自分がいま、どこにいるのか、なぜそこにいるかも考えはしなかった。自分が殆ど死にかけているのも忘れたままで、さしこんでくる光の方に重たい臉をわずかにひらいた」。

最初の回想——。一八四九年のドレスデンの革命一揆で捕らえられて十三年目に会った二人の男、ゲルツェンとオガリヨーフにいきなり噛みつく。「なんだ、坐ってかきなんか食っているのか。ヨーロッパには革命はどこにもないのか。」ゲルツェンが答えた。「動揺しているのはポーランドだけだ。だがツァーが農奴を解放した今日、蜂起の情勢はどこにもない」と。じゃ、イタリアは？ オーストリアは？ トルコは？ オガリヨーフが元氣なく答えた、「どこもかしこも平穏だ、前途の望みはまるでない。」「じゃ、おれたちはどうしたらいいんだ。じっと坐って何もしないなんて、おれは気が狂いそうだぞ。」

わたしは「夢」の原稿の最初の挿話、ゲルツェンとオガリヨーフの夕めし、「なんだ、坐ってかきなんか食っているのか」の部分を読んで、なぜかおかしさが湧いた。秋山に聞いた。秋山さん、牡蠣がすぎなんでしょう？ 彼は答えた。牡蠣はうまいよ。

禁欲的な革命は、あったとしても持続はしない。とくに五〇年以後の日本の運動から、わたしたちの「革命」には、個人や性がびつたりと寄り添いはじめた。わたしは彼の原稿のなかに女性のキイワードを求めた。

「サクソニアで死刑宣告、オーストリアに護送されると絞首刑の宣告、それから三年間壁に鎖でつながれた。ツアーに引渡されてペテルブルグのピョートル・ポール要塞の五年間に、痔と壞血病で歯が抜けてしまい、ひっきりなしの頭痛と呼吸困難と耳鳴りになやまされつづけ、一足とびにまるで老人のようにむくんでしまった。一八五八年（ドイツでつかまっ

「病床にあるバクーニンの夢は、それが未来であるか、過去であるかにすこしのうたがいはなかった。未来への願望から、三十年前の逃亡や敗戦や獄裡の闇に夢がかえっても、たじろくことはなかった。臨終に近づいた人の、その生から死への旅立ちに、生の過去へおくる一瞥が、バクーニンほどに広域にわたる、凹凸のはげしさと、たたかひの熱情に充滿し、毀誉のへだたりのなかにおかれているものは少なからう。」

わたしには受けとれる。そして問いがのこされる。秋山から同意をうけたあの「牡蠣」と「芍薬」とは何であろうか。

まして「坐ってかきなんか」など。ほとんど秋山の地声だから、坐って飯を食い、湯にながなが足を伸ばしているわたしたちの日常が問われることになる。六〇年安保の波が去ってまもなくのことだったから、かきを食っていたゲルツェンやオガリヨーフの返事とは正反対に、キューバ、コンゴ、ラオス、アルジェリアが火を噴いていた。

しかし秋山の目はそこまで届いていたのだろうか？ むしろ情況より内へ、バクーニンに罵倒される相手の側に秋山の目が注がれていたような気がする。

おれが憎んでいる。

群衆を。

肩を組み、プラカードをたて、わらいごえ、うたごえ、みだれる足音、夜とともにぞくぞくやってきた。

あまりにもききなれたうたばかりだ。

旗竿のうえに夜がきて

旗竿のうえのそらに星がにぶくひかる。

おれはまたうたうべき歌がのこっている——」。

「しかし、アントニアはどうして老人くさくさ歯のぬけてしまったおれのプロポーズにしたがってくれたのだろう。シベリヤ原野の夏に咲く芍薬の花のように、生々と、そしてやさしかったアントニア。」

「敵は味方ではない。味方の中に在ろうとも味方でないものは、敵だ。わたしのなかにもわたしの敵がいる。革命のなかにはしばしば革命の敵がいるように。」

「革命のなかにも、わたし自身のなかにも敵がいる、という言葉を未来のわが同志たちよ、ふたたびくりかえすな。」

そして昨夜のあらはしはずまって、バクーニンは目ぶたをあけないまま、窓のほうに顔をむけてつぶやく。

「おれはまだうたうべき歌がのこっている——」。

旗は夜の底でくろく  
夜つゆにぬれ  
ぐっしよりとくたぶれて、置きざりにされ、  
ふみつけられ、  
しのびよる明けがたの充滿する倦怠のなか  
で旗はひしゃげる（略）

「ある孤独」

革命は持続でなければならぬ。持続のなかで一回的な戦いでなければならぬ。にもかかわらず、景気のいい笑い声、威勢がいいが聞きなれた歌だ。それならば坐って牡蠣を食っているより他にないではないか。右の「ある孤独」という詩からは、秋山の悲しみを引き出すことはまちがいのような気がする。もういちど日常へ戻って、自分しかできないことをやる、そのような闘いの開始を、わたしは感じとる。

雨ぐもる この行く道は 月もなく 永代  
橋は 鉄塔の 影おぼろなる 大川に 流  
れも末の 波白き 引汐どきの ひとと  
きを 疲れてつづ 言えらくは かよわ  
き身とて たたかひの このはげしさに  
たえかぬる われにはあらじ 工場に

細き腕に 旋盤の 機械をまわし前線の  
弟に おくれじとのみ はげむべし マリ  
アナに敵は来れり サイパンに人は死にた  
り 昨の日の われも死にたり ぬば玉の  
毛は赤らみて そそけ立ち やわ肌あれ  
て 焼痕は 手に頬にあり 戦争は けわ  
しくも けわしくも 迫りけるかな

三月たちてその掌肉厚み堅き手となる旋盤  
工女 「永代橋」

この歌は秋山の歌集「冬芽」に掲載されて  
いる。一九四四年六月一日、サイパン島守  
備隊三万、住民一万が戦死し、六月一日に  
マリアナ沖海戦で、日本海軍が空母と航空機  
の大半を失ったそのあと。まだ翌年の三月九  
日の東京大空襲を経験していない時に作られ  
たものと思われる。秋山の略年譜によれば、  
前年三月「チークの話」を木材経済研究所よ  
り刊行。五月、妻開子をともない帰郷。すず  
められても文学報国会に入らず。とあり、こ  
の年四四年七月に男子雁太郎生まれる。とあ  
る。戦いが海の向うのものでなくなり、旋  
盤工女として動員された女が、疲れ果てなが

ら、なお前線の弟におくれまいとはげむ。髪  
は赤茶けて肌も荒れ手を焼き傷つき、もはや  
きのうの少女のわたしではない、わたしは死  
んだ、と告げる切迫した銃後の光景を、その  
時点で歌った。

この女性に注ぐ彼の眼差しは、戦中・戦後  
を通して変わらないもののように感じられる。  
秋山は彼の母を通して、女性を見ていたので  
はないだろうか。彼の詩作品には、女性の影  
は少なかつたが、女性論には、多くの理解の  
深いものを残している。右の「永代橋」は解  
説の必要もないが、相似をなすエッセイが残  
されている。（自由おんな論争——高群逸枝  
の「アナキズム」）

「——男たちはむろん戦場に送られて生命を  
投げ出した。が女たちは戦場に夫や子たちを  
送るといったことだけで、それが恐るべきわ  
が生涯に巨る残酷であると考えられることも、い  
うことすらも許されなかつた。戦場の場に出  
ないということでも直接死に直面したのではな  
かつた（部分的にはそれもあつた）としても、  
生活が奪われ、希望を失って、生きがいはた  
だ夫やわが子の帰還を待つばかり、積極的  
には何らかの奉仕を戦争国家のために尽くすこ  
と以外に何一つなかつたではないか。男の出

征と従軍という花々しい生き方に援護されて弱く生きるのみが女の道であるかのように扱われた。ここ数十年間に女性たちが社会的活動の中で、稔り薄く獲得した《女の自由》の僅かな部分さえも、ことごとく戦争の時期には、国家への奉仕の下でけし飛んでしまったといっている。だから『元始女性』は太陽であった」という、らいてうのあの最初の発声が、六〇年むかしと同じく新しい新しさをもって思いつ返される。

おそらく、母と子ぐらしの少年時代にも、戦時の深川時代にも、戦後にも、秋山は女性に対して同じ姿勢を貫いてきたのであろう。「永代橋」の旋盤少女を抱きとることもならず、声かけることもならず、眼差しを注ぐのみ、男性としての弱さの自覚が、つぎの詩にもあらわれている。さきの「ある孤独」と同じ題名の、死んだ母を歌った詩。

四年目の、雨もよいの午后の  
九月なかばにしてはうすら寒く  
意外に人通りのすくない  
銀座三丁目で久しぶり  
出逢った母はいっしょに歩きながら  
きげんよく話しかける。

評論のうえで結論を出せなかった。同人制度をここで解体する時期が来たと思う。歴史的・政治的意義を持たない詩は掲載を断わる。大きな政治詩を書かなければならない。村松の新潟埠頭を書いた朝鮮人を送る詩について、討論すべきだ。かつて古かった、新しいものを吸収した、新しい詩の生産。ぼくは先が短いと思う。老化を防ぎきれなければ、ぼくの詩はメクラになる――。」

そして最後の言葉は、つぎのようだ。  
「詩人は、書くか。やめるか。ケンカするか。」  
日付は一九八六年七月二二日となっていた。わたしの「新潟埠頭を書いた詩……」とは、この日わたしに言いのこすために、あらためてわたしの古い詩集を読み返してくれたのだろう。長篇詩「コロン」の四章にあたる。秋山は正常でなかったのかもしれない。語る言葉はときに軌道から浮遊するようであった。あたかもわたしたちが経験する、夢のなかにひき込まれそうな眠気のなかで、ひき返し、立ち直るときのように、自分を覚醒に立ちあがらせつつ、語っていった。迫力に気圧されながら、そのなかでわたしは、このひとの友情を忘れまい、と決心した。新潟の詩は、

雁太郎、大きくなったな。  
ネコたち、元氣？

鶏頭の花は今年もよく咲いたね。  
何かたべようか。

あれ、まだ、あのまま？

四角な箱の骨壺の包みは  
あのまま棚の上にはこりをかぶっている。  
母は四丁目から、もっと歩いていった。  
「また、ね」  
手でも振るように雑踏のなかへ。

「ある孤独」

「永代橋」の少女にあったような、作者と女性との相聞の距離感が、ここでも感じられる。死んだ母と、突然のように出逢い、墓のことに触れることもならず、無力のわたしは遠去かる母を見送る。このようにして辿りつみると、秋山の女性崇拜という言葉は当たっていないような気がするのだ。秋山の女性への愛は、男性の無力感の率直な表現であった。

愛をかたむけつくすことのできなかった朝鮮の婦人に対しての別れのうたであった。

## 秋山清のやさしさ

『自由おんな論争』にふれて

藤森節子

秋山清は女の人に親切だったなあとと思う。多分、まわりの人達も、そうだそうだと行ってくれると思うが、ほんとうのところは、男の人にも女の人にも親切だったのだ、という気がする。男の人に対しては、その親切が時として厳しい形をとって表わされる。ことがあったことを思うと、女の人に対してはやさしい形をとることが多かったから、その点で、誰の目にも、女の人に親切だといふふうに見えるのだったろう。

今度の本は女の人だけにあげることにした、とか、今度の会は女の人だけの会にするとか口にする時の秋山清は、それがとてもいい思

牡蠣というのは個人の日常の自由なのだろうか。芍薬というのは女性なのだろうか。わたしは、秋山と、この二つの記号によって出会い、二十年を経た。

一九八六年の七月。むし暑い午後だった。二年まえに歌集「冬芽」を出版した書店の山崎一夫をさそって、神田の太木てるえの家を訪ねた。秋山に心身の衰え目だちはじめ、時に恐怖の幻想を覚えることも多くなった。「きみに言いのこしたことがある」という伝言があって訪問したのだが、わたしに心の用意はなかった。「これからぼくが言うことを忘れないように、メモをしたらどうですか」。

わたしは大木てるえに目で合図したが、適当な紙もなかった。そうだ。坂井ていが傍らにいた。坂井が白い封筒をくれた。表に「東京生命」の社名が刷られている。封筒を破って、その裏紙に、わたしは乱れた字で秋山の言葉を書き綴った。

雑誌の「コスモス」についてだった。同人の作品が低調だったから、「白紙」で刊行してもいいではないか。「誰のために詩を書く」という提議について、「コスモス」は作品と

いつきであることをひとり得意がったりしながら、こまめに連絡などをとっていたようだった。どんな人に本をあげたかなどは知る由もないが、会合などの場合は、蓋をあけてみると、ちゃんと男の人が参加していた。――ただこの場合、女の人だけ、などという惜たれ口をききながら、その実、その会の運営を女の人の自主性にまかせ、そこで女の人たちが自由に振舞いながら力を発揮する場をつくってくれたのじゃなかったかと、今にしてしみじみ思われてくるのである。秋山清のやさしさは、女の人への信頼をとめないながらそんな形をとっていた。そしてそんな場合、まわりの女の人たちは、秋山清の心遣いを照り返すかのように、それぞれの持味を生かしてさりげなく会を切りまわし、なごやかな会をつくりあげていった。

このことを更に臆測するならば、男の人が感じどっただかどうかは別として、女の人やり方を男の人を取り入れたらどうかと、そのやり方をみせることを秋山清は考えていたかも知れない。いい考えでしょ、とニコニコしている顔が目前に浮かぶが、秋山清は決してそれを口に出して強制する人ではなかったから保証はできない。

親しくなつて間もない頃に、『郷愁論』や『自由おんな論争』を私が貰うことになつたのは、今度の本は女の人だけに、という東京の女の人たちへの余波が名古屋の私にまで及んできた結果だつたようだ。

だが、たとえ余波をうけたのだつたにしても、贈られた本に対して私はなんにも応えていなかったな、ということ、十幾年ぶりにこれらの本を読み返してみても、ほとんど打ちめされるように思ひ知らされた。

たとえば『自由おんな論争』にしても、私は、それを逐一、懸命に読んだことは読んだのだつたが、高群逸枝の著作が全集として刊行されるにあつて、主として『婦人戦線』を足場に、アナキズムの立場から果敢な論陣をはつた高群の初期の論文が全集から除外されていることに対する、秋山清の異議申し立ての書としてのみ受けとめていたのだつた。それはそうに違ひないけれども、まるで、過去の歴史を遠い出来事として外側から知識を学びとるかのようなり方であつたのだつた。

中にくりひろげられている高群逸枝と山川菊栄の論争も、自分が生まれるほんの少し前の女性たちがこのような考えをぶつち合つて

いたのかということ、良妻賢母型の我が母親と比べて全く驚きではあつたが、歴史のあとをたどるような形で、双方の言い分を読み取り理解しようと努力することで精一杯だつたのである。

「まじめ」な読み方ではあつたが、実はまじめでもなんでもなく、こちらに秋山の『自由おんな論争』を受け入れるほどの内実が育つていなかったにすぎない。

今度読みなおしてみても、その内実が育つたかどうかはあやしいが、それでも、私もぼんやりと、とりとめのないことを積み重ねてきたようでも、この十幾年の年月が無駄であつたというわけではないのか、『自由おんな論争』から、秋山清からのいろいろなメッセージが聞こえてきて、感動を覚えるのである。なかには、秋山さん、こはちよつと、などと、つかつかつてみたいということもある。だが、私がやっとここまで歩いてきた今、そのことをまっ先に伝えたい相手である秋山清は、もういない。——おそすぎた。いや、しかし、秋山は、そんな小さな個別的な対応を望んだのではなかつたような気もする。もつと私たちを自由にさせてくれていたから、播いた種が今ごろになつてじんわりと発芽しか

かつていふことでよしとしてくれるにちがいない。

高群逸枝全集には完成された著述だけを入れると決めてかかっている編集者橋本憲三の「欠落のすくない叙述や研究のみをもつて、人としての到達を論評することに、私はかならずしも完全に賛成しようとは思わぬ」。へむしろ、思ひつきや、ふとした強情さで、行きがかりに固執するつよい自我が発散する非論理的な言論の中にも、明日を開拓する萌芽を見出すことがあるのではないか。——という一節がある。〈期待すべき未来は、そのような生命力からこそ生まれて、永く人間の将来を指示しつつ輝くものではないだろうか。〉と強い言葉で未熟な中にひそむ力を大切に、しっかりと支持していることに、私は深く心をとらえられた。

それは、いつまでたつても未完成なままの私自身を合理化し、その上にあぐらをかくのに都合がいいからだけではない。

いい加減なところで自分を失つて妥協をしつてしまふことをやめよ、自分自身があくまでも自分自身であることに固執しろ、とけしか

けられているようでもあり、と同時に大事なことは、他の人がつよい自我を発散する時、たとえそれが未熟であつてもつづいてしまつてはならないのだ、と警告されているようでもあつた。

秋山が高群逸枝と山川菊栄の論争のうちに見たのは、高群の中にある〈明日を開拓する萌芽〉だけではなかつた。論争における高群を「アナキストとしての自覚が充分であるばかりでなく論鋒の鋭さは群を抜いており、その仮借ない発言ぶりにもまた異彩を放つものがあつた」と秋山は評している、では、高群は論客として申し分なかつたではないか、と思われるのだが、それでも相手の山川と対するとき、その合理的な論法、思考と論理、現実の女性の置かれた社会的家庭的地位や対男性との社会的対立あるいは協力についての批判的考察から、将来女性解放に至る思考の論理的組立てにおいては山川に一步を譲らねばならなかつたようである。——が、にもか

かわらず、秋山は、高群の中に「人間的考察の深さ」、〈女性の可能性、すすんでるか未来の女性の發揮すべき人間としての可能性までを含めて、「女」を考え論じ主張するときの女性の理論のふかさ〉を認め、そのこと

を強く推している。一方、対する山川が明快に「婦人が単に性の対象たることに満足し、性によって生活することに何等の不満と屈辱とを感じずにいる間は、職業的娼婦たることを問はず、彼女はついに性的奴隷であり、売物の一つであることに変わりはない」と言い切る時、秋山は、その言葉に、〈どこからか四書五経的な、そして男中心の時代をさほどに不自由と感じないなにかのにおいの発散する〉のを嗅ぎとつて、そこに人間の自由の問題と重ねあわせた現実的な考察がないと批判する。

あるいはまた、山川の、論理的ではあるが単純な裁断にたいして、秋山は鋭敏にも不安を感じとる。いい切つてしまふだけでは、日常生活の中で解決しなければならぬことを、かえてねぐつてしまふことになるのではないか、個人の立場から現実にはアプローチすることの情熱的意義を軽んじすぎているのではないか、というのである。

もともと、この『自由おんな論争』には、「高群逸枝のアナキズム」という副題がついており、アナキスト秋山清が、アナキズムの立場で書いた高群逸枝の論文に光を当てようとするためのものだから、秋山が高群の論文を

強く支持するのは当然であり、また山川に対して鋭く厳しい批判の目を注ぐのも当然と言えるであろう。だが、私には、その論争の内容そのものよりも、秋山清の論争の紹介、分析、批判のために書かれた文章のなから、多分、秋山自身が自分で考えていたであろう目論見をはるかに超えたメッセージが届けられてくるものを読み手である私のほうが感じとつていふのではないかと思う。

女性解放につながる運動のあれこれのなかで山川に向けられた秋山の批判は、その思想的立場以前のところでいつも忘れないでおこうと思う。論争から六十年もたった今も残念ではあるが有効な批判なのである。

今なお有効であるのはこうした批判だけではない。『自由おんな論争』や、「夢」と大杉「大正の恋愛」などに表われる秋山清の恋愛観は、今なお有効どころか、未来社会へ向かつてなお継続して考えられなければならないもののように私は思っている。

未来の社会で、男と女はどのような結びつきをするのだろうか。今は女性解放の方向に向かつて針が少しは進んだが、恋愛が体制をゆるがすほどに男も女も自由ではない。道徳化した習慣や制度や生活形式の一部では破れ

かかってはいても、それはかえって当事者個人が返り血をあびる形であって、頂点にある天皇制を支えることをやめるまでには道は遙か遠い。秋山清は、その遙かな道を歩きつづけた人だった。

秋山清の女の人に対するやさしさが、女性解放の未来へ向かって歩きはじめて人に対して、あるいは個人としてのたたかいに傷ついた人に対してもどいたのは、秋山のやさしさの底に秋山の確とした思想があったからではなからうか。

だから、といてよと思うが、秋山は、女の人にやさしくはしたが、甘やかすということにはならなかったのである。

## 『恋愛詩集』など

清水 清

秋山清に『恋愛詩集』というのがある。三十五篇ばかりの詩が収めてあるが、その中で「かもめたちよ」という如何にも恋うたらし

い詩が私は好きだ。いつ書かれた詩なのかわからない。全詩集のような秋山清詩集にも入っていないし、自選詩集にも採っていない。根拠はないが、詩の感じから戦後十年ぐらいの、秋山五十才前後の頃のものではないか、という気がする。

内容は、寒い風の吹きさらす高架線の電車ホームに、約束の時間をとくに過ぎて来ない恋人を、かたくなに待ち続けている男の心情を描いたものだが、日暮れに近い雲や、紙屑のように舞う、かもめや、外側の風景の描写から段々と男の気持ちの内側へと書き進んでゆく方法がとられていて、外側も内側も写実である。結びの部分の

寒さをわたしはこらえる。

どこにいるだろう。

誰というだろう。

そらにひるがえって漂々たるかもめたちよ。

今朝から百時間もたった気がするのだ。

はたいへんいい。△どこにいるだろう▽△誰というだろう▽は、男の弱さを複雑に、正直に出している。この詩は、この部分がなければ、そんなに感心するほどのこともないのだけれど、この二行をこんな風に見えるのは、簡単そうにみえて並大抵のことではない。こ

この過不足がこの詩の出来を左右する。そう云って、この詩を秋山にほめたら、この程度の詩をほめるようじゃ清水の批評も甘いね、と云われた。

詩がうまい、という点でなら、この詩集のはじめにある「やまざくら」や、八十行を超える力作の「波のうた」の方が上だが、恋のうたとしては、人間の弱さの出ているこの方が私は好きだ。秋山は、書き出しと、特に結びのうまい詩人だが、コスモスでいえば、長谷川七郎と押切順三が、そういう技術のある人だと私は思っている。

私は詩でも文章でも、頭の中で、ああでもない、こうでは駄目と、書き出しから終りまで、ひと通り形が出来てしまわないと、原稿紙に書けないのだが、そういうやり方は駄目で書きながら考え、考えながら書いて、詩ならば書いた原稿を横に長くつないで、壁に貼り、何日も見ていると、その詩のどこをどうするかが見えてくる、と秋山は私に教えた。事実、秋山の部屋の壁には、そうして詩が貼ってあり、思いついた時にやるらしく、手が入れてあった。教えられて私もマネてみたことはあったが、壁に貼るまでのところが出来ないで、このやり方は私には向いていなかっ

た。ただ、私のようなくせがあると、長い原稿は書けない。せいぜい十枚ぐらいが限度である。

『恋愛詩集』の出版は一九七七年、秋山七十三才の年である。あとがきに古稀の記念に詩集でも出さないよ、それも至極ありふれた恋愛詩集というのを、と誰かにすすめられたのが、きっかけで、古いノートや、既刊のものから拾い出した、とあり、詩というにはためらいたくもなる、幼いものが多かった、と記している。そういう意味で、全詩集にも自選詩集にも二篇しか入っていないのかもしれない。幼い、という意味は多分中身のことだと思うが、へりくだってみせたのでなければ秋山らしくない。どんな人生にとっても、恋が軽い筈はない。七十三才にして恋愛詩集が出るなどということは、さらにあることではないから、秋山は、てれくさかったのかも知れない。そのくせ、△ひたむきな心とともに肉体もまた息づいているような△恋の詩をもう十年もしたら書けるようになるかもしれない、とも書いているが、十年たった頃の秋山の詩は逆に娑婆っ気のぬけたようになっていた、と思う。詩にとっても、思想が大事な人間が大事か。比重を計るようなことではな

いかもしれないが、私は若い時は、思想だと思っていたが、年をとるに従って逆に思うことが多くなつた。だから秋山の代表作のひとつでもある「われを上げます歌」よりも『恋愛詩集』の諸作品がつまらないとは考えない。

秋山には「あとがき詩人論」という本がある。そのくらい秋山は後輩の詩集のあとがきを書いており、向井孝の詩集『ピラについて』に書いたものが、最後のあとがきだろうと思うが、詩集の出るより前、この頃は、秋山は四、五日に一度くらいは、私の家へ来てくれて、というよりは、ほんの数軒先にあるコーヒー店に私を呼び出して雑談をした。プロ野球の話であったり、相撲の話であったり、詩の話でないことの方が多かったが、その或る日に、向井の詩集のあとがきにね、向井の詩は抒情詩だ、と書いておいたよ、と云った。向井の詩が抒情詩であることは、わかりきったことであり、秋山が何んのために、わざわざそれを強調するのか不思議な気はしたが、なぜ?ときいてみもしなかった。暫くして、向井が詩集を送ってくれて、秋山が向井は抒情詩だとわざわざ書いた内容がわかった。あまり簡単に云ってしまうと間違いになるかもしれないが、向井孝らが詩運動のイオム

で目指した△うたうことから描くことに変わることによって、感情の表現だけでなく、感動の主体をつたえる△方法は、それまでの素朴な抒情詩から遠ざかろうと考えたのかもしれないが、写実的なそのような方法も抒情詩から脱け出るものではない、ということだ。秋山はもっと重要なことを政治と文学のかかわりについて、ここでは云っているが、私の解釈は、あえて皮相な方法論の方にしておく。向井たちの目指したものは、秋山の詩「大石原」などには充分見えてとれる。干潮のあとにむき出しになって、ごろごろしている石原の風景を描いてみせたこの詩は、深いニヒルである。作品の書かれた一九五四年は、ヒキニの水爆実験による死の灰を第五福竜丸が被った年であり、秋山の「背なかにはない」の材料になった皇居参賀の群衆が押しつぶされて人死にも出た事件のあった年でもある。「大石原」の意識下に、これらの事件が下敷にあつたらうことは想像に難くない。この「大石原」は、あまり話題にならなかったが、秋山の詩の代表的な秀作であると私は思っている。戦中とはいっても、敗戦を目前にひかえた昭和十九年に書かれた「おやしらず」、敗戦の翌年に書かれた「近江路」など、何れも秀

作である。「大石原」も含めて、これらは、叙景の詩だが、うたうことではなく、描くこととの抒情詩である。そして、表現は技術の進むに従って単純化される、といっていた秋山の持論を裏づけている。

## 夢二の漂泊

暮尾 淳

秋山清著『竹久夢二』（一九六八年、紀伊国屋新書）を読まなかったら、わたしは夢二に関心を抱くことはなかったろう。とはいえず、当時のわたしの関心の寄っていくところは、平民新聞や東京災難画信、榛名山産業美術学校時代の夢二にあった。あのうるみがちな夢二に見ているような大きな瞳と長くほそい手の、たよりなげなおんな絵を描いて一時代を風靡した画家の、それはわたしの知らない一面であったのである。「夢二という男は、みかけはごつい男で、洋服だけはいつもいい洋服をきていた。そこにうつくしいものを夢みて、

それを画にする大きなひっかかりがあるようだ。所詮、現実の汚なさ、みにくさを外して、美の心情の住みつく手がかりはないらしい」と評したのは金子光晴であるが、その「ごつい」部分にまずわたしは惹かれたのである。「宵待草のやるせなさ」程度の知り方でしかなかったわたしには、「一張羅の黄八丈の綿入」に泥をはねかけられた娘に、「自動車の中なる／かの貴婦人のまどえる衣のために／幾人の工手が血と汗を流したりけむ／工手の妻こそ泣くべくに。／おしまよ。／さは泣かぬものぞ。」と素朴にうたいかける夢二の詩「往来」などは、新鮮な発見だった。市井庶民のなかに住む画家夢二のおんな絵が、子守、女中、女工、物売り、女給、角兵衛獅子などを多く画題としながらも、「現実の汚なさ、みにくさを外して」失われていくやるせなさのなかに、近代日本の憧憬を抒情の姿で写しとっていたのも、わたしは秋山の本で知った。

しかしアナキスト詩人秋山の夢二への傾倒を、この視点からのみとらえることは、そのことをひろく世間に認めさせた意義は別として、秋山の本意とするところではなかっただろう。それをわたしは以下に探ってみよう

思うのである。

『近代の漂泊』（一九七〇年、現代思潮社）で秋山は、「詩をかくというくらゐのことを詩人の資格などとはさらさら思わない。詩人とは、われをつらぬいて生きそして死ぬ者、とかたく思い込むようになった」と言い、乃木希典、天田愚庵、野口雨情、鶴彬、伊藤和、植村諦、和田久太郎、竹久夢二、石川啄木の九人を詩人として論じている。そして、「彼らを何故に漂泊者ということができるか。一所不在の思いに執るものでなかったとしても、彼らは、肉体か、精神かを、放浪のなかにつきはなさずには生きなかつた」と書いている。ここから夢二の、夢と郷愁の抒情まではほんのわずかの道のりであるが、その前に、野口雨情についての秋山のことばを聞いてみることにする。なぜなら、わたしの知る限りでは、雨情論執筆のほうで秋山は早かつたからである。それはまず雑誌『人間の科学』（一九六四年十一月号）に発表された。その時わたしは、雨情がアナキストの運動に近親感をもっていたという秋山の指摘が、かすかな聞き覚えから展開されていくみごとさに、おもわず目を瞠ったのをおぼえている。「捨

てりや葱でも／しおれて枯れる／お天道様見て／俺泣いた」の葱に、家から放り出された大正の農村の女をダブルイメージさせているという読み方にも、結局は納得していった。わたしはおくての二十代だったのである。秋山は雨情を次のように論じている。

彼が故郷にもったイメージは現実の生れ故郷にはすでに存在せず、とすれば、雨情の思う「故郷」というものには彼の夢想が転嫁されていて、それは伝統的性格のつよいあるユートピアということにならないであらうか。この現実的ならざる故郷を思うことに彼の詩の夢が託されたのである。

（略）生活苦がなく、人と人との争いがなく、恋愛が自由で、労働がたのしく、うたが流れて、人々がたのしんで、そんな国はどこにもありはしない。だが雨情の数多い民謡作品から帰納して考え得る彼のユートピアは、都会的でなく、ギスギスしない日本の田舎のどこかだということになる。雨情は流浪の日には故郷を偲び、故郷に戻った後は流浪者のように自分の生活をもめてそこを去った。何処にも落ちつくところを持たなかったのである。

これは東京オリンピックの年に書かれた。オリンピックを境にして、東京の街も生活も大きく変貌した。高度経済成長の波は、国中いたる所の一本一草をもゆるがさずにはおかなかった。秋山はそこに、伝統へのノスタルジアに敗北をかさね、「そんな国はどこにもありはしない」という「近代の漂泊」をみていたのである。「すでにないもの、あつてやがて喪失するもの、破壊されるもの、すでに失せたもの、失せつつあるもの、このはかない人間の生活に、自分のテーマを見ていたのが野口雨情であった」と言う秋山は、「彼のうたが亡ぶものの郷愁であったこと」に意味を見出している。それが雨情にあっては、樺太、北海道を流浪の果ての「どうせ二人はこの世では／花の咲かない枯すすき」という土着の情念を内包することによって、無意識のうち逆ユートピアを暗示し得たのである。

このことは秋山が、その自我に根付いていたユートピアへの回路を、それはたぶん政治も文学もというところのナショナルな土壌を、すでに漂泊のニヒルに傾けていたことを物語っていると、わたしは考える。非命に終わるしかない生き方、時代の趨勢と一致しないアン

チ派、夢と理想とが世間とくいちがう失敗者。そのような詩人に光を当てる時、秋山の文章には熱がこもっていた。反権力と言うほどには強くないが、はみだし、あぶれてしまふ一つの個性に対しても、秋山のみる目は優しかった。

すこしずつ脱落し  
群をはなれ  
色があせ、ばらばらになり  
より小さな一団となり。  
そらへにげたのも。垣根にひっかかったのも。溝におちたのも。

晩秋の離合集散。  
ひとりびとり  
土気いろにかわき  
かさだかい音をたてて  
気まま勝手に  
ねたり起きたりした。  
みじかいこの幾日かたのしかた。

これは『ある孤独』にある「落葉」（一九五七年）の後半部分である。落葉が風に吹かれる生態を描写しただけの作品であるが、ここには秋山のささやかな自由への想いを感知

することができる。「みじかいこの幾日かたのしかった。」という最後の一行が、乾いた抒情となって或るはかなさを醸し出す。郷愁のようなものを奏でる。それをいま、わたしは竹久夢二の絵にかきわけてみようとしている。

秋山清が「郷愁論——竹久夢二の世界」(青林堂)を出したのは、一九七二年であった。秋山は「夢二の郷愁」について、次のように言っている。

郷愁とは、孤独者が孤独ならざる集団や自分がかつてそのメンバーであった生活への追想的憧れを、求め得ない時の嘆きである。孤独感のないものには郷愁など有りようもないのである。

もちろん孤独を意識しない芸術表現は存在しないだろうが、夢二もまた癒されることのない郷愁をかかえ、ボヘミアン・ネクタイをして、街を村を、スケッチして歩いた。そのことに没頭している間のわずかな充実、それを目指める一途な漂泊の旅が、夢二の生涯であった。アメリカにも、ファシズム進行下

のヨーロッパにも、夢二の放浪は現われた。しかもそれは「夢がだんだん失われてゆく」姿で、金子の言う「いい洋服」を着ていたのである。夢二は死ぬまで美という虚構を手放そうとはしなかった。

秋山は次のように言う。

漂泊とは？ 私はそれにこう答える。「漂泊とは反逆である」と。いくら唐突にきこえるかもしれないこのようなものいい方を、こう理解してくれることはできないであろうか。

漂泊と逃避とはしばしばいっしょくたに考えられる。それは全くのでたらめではなく、現実と角逐しないということでは漂泊は逃避と一つかもしれない。しかし逃避は現実の下に安住することもできるものである。立って振くことをしなないと、漂泊には今日と明日のわが生活の安定もその目処もない。風に吹かれてさまようものと同じような行く末に、自我を没した放棄がある。なりゆきのままに、風のままに、行ってしまう、また流れるといった不安定にまかせきっている。その「不安定」とは何のことをいうのか。そもそも、人間生活の中

で、家をもち、家庭をつくり、それを永続させようとする努力を吾等の運命であるとすれば、漂泊とはそれに逆らうものでなければならぬ。

わたしたちのささやかな生活において、運命に逆らうもの、それは漂泊であり、漂泊の抒情は、見果てぬユートピアへの郷愁を根深くもっている、と秋山は言う。それは現代人の人間的情緒の深層に、癒されない渴望として眠っている。夢をみている。その誘いは、わたしたち心弱いものに、いつも甘美なメロディを奏でる。

恋することは旅心をかきたてる。恋愛は破調への予感において、うつくしい瞬間のほなやぎをみせる。しかしいかなる恋の陶醉も、いつかは醒める。人間の生理も、社会と共に機能しているからである。それゆえ雨情も、夢二も、それぞれの恋愛の真実を反逆の心情として近代を漂泊せざるを得なかった。そのさすらいの旅芸に、生活の側の民衆はあこがれを託した。秋山はそこに共鳴した。支持し、振りかえる何かが、秋山にはあったからである。

秋山は放浪に身をゆだねはしなかった。母

と二人きりの生活があったゆえもある。もともと周囲に対して非情になり切れない、その性格もあったろうし、自由の少ない時代に、自由を実現する思想として自らに課したアナキズムもあった。しかしその目は、かつて海に向こうをながめて育った日々のように、絶えず果てしないユートピアを夢見ていた。その孤立の意識は、時に郷愁の情緒となり、「落葉」や「近江路」、「なぜ、音もせず」などの詩の世界となった。秋山清も、「一所不在の思いに執るものではなかったとしても」「肉体か、精神かを、放浪のなかにつきはなさずには」生きられなかったのである。しかもそういう己れを、この詩人は、「近代の漂泊」という醒めた目でみつめていた。

わたしが岡山県邑久町の夢二の生家や、岡山市の郷土美術館、竹久夢二伊香保記念館などを訪ねるようになったのは、ここ数年來のことである。つい先日は、寺島珠雄に知らされて、竹中英太郎を根岸の弥生美術館にみに行ったが、ついでに夢二のいくつかを目にすることができた。

その一枚に、死の四年前である「一九三〇／やよひ花奴のために」という色紙があり、

それには「夢酔」と署名がしてあった、と記憶している。夢二には、夢生という署名もある。が、いまは署名のことはどうでもいい。わたしが言いたいのは、酔生夢死ということについてである。秋山はどこかに、それは現実の肯定であると書いていた。それを世間に標榜するならば、たしかにそうであろう。しかし心の奥底に強く憧れとして秘めている時、その生きている姿は現実放棄の擬態にはならないだろうか。

なぜこんなことを、蛇足を承知で書くかといえ、わたしは、秋山の晩年のニヒルをしきりに思うからである。われを励ます反権力の姿勢は崩れることなかったが、秋山の抒情は、漂泊の果ての酔生夢死に想いをめぐらすことしばしばではなかったらうかと、そのようにわたしは思うからである。

『コスモス』は人民詩精神を、敗戦後のあの時期に掲げて発足した。わたしは遅れて参加した世代だが、詩人秋山清への理解の不足と不親切を、いまさらのように知るものなのである。